

哀歌讃歌 田川 律

“幻のグループ”一年以上も前から、大妻女子大フォークソング・クラブは、ぼくにとって、そんな存在であった。何人かの親しい友人たちがこのグループの力を誇吹してくれた。レゲエをレパートリーにしている。大塚まさじの歌をうたっている。そのどちらもが、この国でまだ“マイナー”であるだけに、いよいよその存在は気に懸った。

春が来て、環状7号線に面する地下の小さな喫茶店で、ぼくは“幻”と対面した。複数の“幻”たちは現実のものとなり、急激にぼくは、かれらと親しくなった。

夏が過ぎて、秋になり、ひよんなことで、ぼくが作詞した「三番町の子守唄」を、かつて彼女たちと同じ年頃の若者たちが無益な死に駆り立てられた霞ヶ浦で聞くことになった。暗い水面の小波に向かって、うたわれた「ハーダー・ゼイ・カム」は、ぐらぐらする栈橋のリズムと溶け合って夜空に消えた。

石の段々に枯葉はもう一枚も見えなくなり、だが、薄紅色の花弁が宙返りをするには、早過ぎる季節に、“幻”は、ひとつの区切りとして定期演奏会をする。“幻”こそが現実である舞台上、彼女たちは、何か月にも亘った日常の現実を“幻”に化身させ、舞い上がらせる。営々と働いて得たお金を練習のあとのお茶代に使い、帰宅が遅いといっちは両親の叱責を浴びながら、彼女たちは、この120分に向かって歩んできた。“哀歌(エレジー)”とはいみじくもつけた題名だ。

けれども、そんなことは、今宵“幻”たちの歌を聞く者にとって、それこそ幻なのだ。だからこそいいのかもしれない。

歌がそれらを黙って背負い込んでくれる。

不幸せの星を、夢の国へ拾いに行くのは、ほんとは、これからなのだ。それがどんな星か、ぼくでさえ見てない。

けれど“幻”でないことは確かだ、歌たちはそれをもまた秘かに背負い込んでいる、と思うのだ。

三番町の子守唄

(作詞:田川律 作曲:下村誠)

※赤い電話→赤いレンガ でもよい

(1) 三番町の坂のふもとの四つ辻に

夏の終わりの風が吹く
季節はずれの赤トンボ
赤い電話(※)でひと休み

夕暮れがあたりに漂うと
町の空にも町の夜にも
星がひとつ、薄っすらと

おやすみおやすみ
今宵不幸せの星を拾いに
私は夢の国に、旅に行く

(2) 三番町の坂のふもとの四つ辻に

秋と冬が通り過ぎ
帰り忘れた枯れ葉が2枚
石の段々でひと休み

夕暮れがあたりに漂うと
町の空にも町の夜にも
月がひとつ、にっこりと

おやすみおやすみ
今宵不幸せの星を拾いに
私は夢の国に、旅に行く

(3) 三番町の坂のふもとの四つ辻に

春らんまんが訪れて
薄紅色の花びらが
ひらひら飛んで宙返り

夕暮れがあたりに漂うと
町の空にも町の夜にも
星と月 ひっそりと

おやすみおやすみ
今宵不幸せの星を拾いに
私は夢の国に、旅に行く



大妻女子大学短期大学部フォークソングクラブ
7代目定期演奏会『三番町哀歌』(1978年)
プログラムより